



今月は市民の安全を守る行田市防犯推進委員会会長の横田純さんを紹介します。
横田さんは、以前自治会の「防犯担当」として盗難事件が発生しやすい神社や公園などを重点的に見回りをするなど、4年間防犯活動を続けてきました。その実績と信頼から自治会の推薦を受け、行田市防犯推進委員に就任し、10年以上市民の安全を守る活動を続けています。
現在は他の防犯推進委員と一緒に青色回転灯が設置された「青パト」(青色防犯パトロールカー)に乗り、地域の安全・安心のために小・中学校や公民館の周辺などを中心にパトロール

を行っています。また、警察から市内で発生している犯罪情報などの提供を受けて巡回を増やすなど、防犯対策を強化している他、年金支給日には振り込み詐欺防止の啓発運動として郵便局前などで啓発ティッシュを配るなどの活動も行っています。
今年の2月に発足した、警察とコンビニエンスストア、防犯推進委員会の三者が協力して行う「忍び活運動」。この活動について横田さんは「三者が協力して行う良い取り組みで、銀行や郵便局にも広がってほしい。始まったばかりですが、これからの効果に期待しています」と防犯活動のさらなる普及を目指しています。
また、横田さんは、パトロールの際に、何かが気になることがあれば警察にすぐに情報提供を行うとともに、振り込み詐欺防止のアナウンスを流すなど、犯罪の抑止や被害の防止に努めています。そして、犯罪に巻き込まれないためには、一人一人が「固定電話などに録音機能のある機器を取り付け、知らない電話番号には出ない」などの対策をして欲しいと語ります。
犯罪が増加し、市民の安全・安心が脅かされる中、横田さんはこれからも「青パト」に乗って地域の安全・安心を守ります。



安心を灯す青色の光

横田 純さん (真名板・74歳)

子ども司書チャレンジ ~やってみよう! 図書館の仕事~

- ▶日時 8月7日(木)・8日(金)午後1時~4時
- ▶内容 窓口業務(書架整理、貸し出し・返却作業)、POP作成、本の修理など
- ▶対象 小学5・6年生※2日間連続で参加できる方
- ▶定員 3人程度(申し込み多数の場合は初めての方を優先し抽選)
- ▶申し込み 7月23日(水)までに行田市電子申請・届出サービス、直接、電話のいずれかの方法で図書館※抽選結果は7月31日(木)までに連絡します。



電子申請・届出サービス

図書を通じての世代間交流事業(寺子屋事業)「おじいちゃん おばあちゃんのたまたまはこ」

- ▶日時 ①8月7日(木)②8月8日(金)いずれも午後2時~2時30分
- ▶場所 図書館おはなしのへや
- ▶内容 ①えほんと手あそびなど②はじめてのおもしろこうさくなど
- ▶対象 幼児~小学校低学年の児童および保護者

夏休み特別映画会

- ▶日時 8月11日(月)午後1時30分(午後1時10分開場)
- ▶場所 「みらい」映像ホール
- ▶題目 「学徒兵 許されざる帰還~陸軍特攻隊の悲劇~」(上映時間54分)
- ▶内容 戦局が悪化する中で始まった陸軍特攻作戦。なぜ特攻作戦に突き進んだのか。元特攻隊員の証言と司令官が残した日記を元に、陸軍特攻隊の真実を追う。
- ▶定員 70人(先着順)

~初心者歓迎!~ぎょうだ電子図書館を使ってみよう! あなたのスマホが図書館に電子図書館を活用する方法を伝授!

- ▶日時 8月3日(日)午前10時30分から
- ▶場所 図書館ミーティングルーム
- ▶対象 市内在住・在勤・在学の方
- ▶持ち物 スマートフォン、タブレット(お持ちの方)、図書館利用カード



開館時間

午前9時~午後7時

休館日

7月 1日(火)・7日(月)・14日(月)・22日(火)・28日(月)・31日(木)、
8月 4日(月)・12日(火)

※休館日の図書の返却はブックポストをご利用ください。

●市立図書館●

佐間3-24-7(「みらい」内)

TEL:556-4227

FAX:555-3770



行田歴史系 376

資料がかる行田の歴史

76

足袋のまちの風物詩

行田足袋の製造は、布地の裁断から縫製、仕上げまでを含めておおむね13工程に分かれるとされています。これは足袋本体の製造工程であり、製品として出荷されるまでには、ラベルの添付や梱包など、さらにいくつかの段階を経なければなりません。また、足袋の材料となる大量の布地も裁断されるまでに入念な下準備が行われます。つまり、単に「足袋を作る人」だけでは足袋産業は成り立たないのです。素材の加工、印刷、鉄工、機械整備など、少なくとも20を超える業種が行田の足袋産業に関わってきました。こうしたさまざまな技術を持った人々(専



段干し(昭和30年代、郷土博物館蔵)

門的な言葉では「諸職」と呼びます)によって、行田の足袋産業は支えられてきたのです。
足袋産業を支えた諸職のひとつに「貼り屋」があります。貼り屋は、足袋用の布地を裁断する前に、のりで貼り合わせる手作業を行っていました。石底織とネルの組み合わせ、晒と雲霧織の組み合わせなど、使う布地は製品によって変わりのりも数種類を使い分けていたそうです。かつての行田市域には40軒ほどの貼り屋があったといわれていますが、その多くは広い敷地を持っていて農家でした。貼り合わせた後の布地を大量に干すために、広い敷地が必要だったからです。ちなみに、農家が足袋関連の仕事に兼ねることは貼り屋に限らず、行田市域においては珍しくありませんでした。

布地の干し方は季節によって異なり、夏は低い位置で平干し、冬は高い位置で段干し(高干し)していました(写真参照)。大量の布地が天日干しされている光景は、まさに足袋のまちの風物詩だったと言えます。今では見られなくなりましたが、語りが継いでいきたいと思います。のひとつではないでしょうか。
(郷土博物館 岡本夏実)

俳句壇田

ぎょうだ はいだん

俳句応募方法

一人3句以内。住所・氏名(ふりがな)・電話番号を明記の上、はがきまたは封書で広報広聴課まで。※毎月末日必着
なお、「一部添削して掲載する場合がありますが、不要であれば「添削不要」と記載してください。

五月休遊び心のある卒寿

富士見町 江利川敏夫

【句評】五月休はゴールデンウィークのことである。人々はこの大型連休をどう過ごすかとワクワクしながら計画を立てる。九十歳になってもまだ思いを巡らせているのだ。素晴らしい人生ではないか。美しく老いたし映の願望。白陽といふ句があるが、書家としても活躍している作者の生き様は理想的で見習いたいものである。

手作業の過去ふり返る麦の秋

荒木 高澤よね子

【句評】昭和三十年代までは農繁期になると田んぼに人々が集まり、人海戦術によって農作業が行われ、昼時には畦でにぎり飯をほろぼり、まるで祭りのようにならざるを得なかった。卒寿を過ぎた作者はそんな光景を懐かしく思い出したのだ。急速に機械化が進んだ現代ではたんとと機械が行き来するだけで人の姿は見かけなくなった。郷愁の一句である。

記念樹の桜伐採空へ

樋上 吉澤とし子

【句評】桜は日本が世界に誇る花木である。ところが近年寄生虫が発生し、全国の桜が危機に瀕している。市内でも対策に追われているようだ。花見を期待して成長を心待ちにしていた桜がむしばまれて伐採を余儀なくされる無念さはいかばかりであろうか。特に記念樹であればなおさらである。下五は解放感や清々しさを表す語であるが掲句ではむなしさを表現する。

- 筒の掘られて竹になりそこね
まちをゆく人みな老いて花は葉に
動き出すからくり時計風薫る
ミモザ咲き夕暮の道さんごめく
紫陽花や暇が荷になる楽隠居
代掻きの轍に鳥は列をなす
花月夜汁で掻っ込む一人めし
- 長野 牧 努
小見 川島 盾子
緑町 松林 真弓
忍 大澤 由子
南河原 今村 文女
門井町 塚原 武夫
棚田町 奈良佐智子
(三沢一水選評)